



なきごえ



1993

8



(撮影：中川 哲男)

もくじ

- 2 — New Face ニホンコウノトリのヒナ誕生
- 3 — 動物と私 ピンクのシロチドリ(納家 仁)
カバーウォッチング アカカンガルー
- 4 — お寺の森での環境教育の実践(久山喜久雄)
- 6 — 動物園ボランティアの教育活動(山本貴洋子)
- 8 — グラフZOO
- 10 — 獣医室から ⑥
- 11 — ZOO DIARY

カバーウォッチング

アカカンガルー
フクロネズミ目 カンガルー科
Macropus rufus

オーストラリア大陸の平原に生息しています。カンガルー類の中では最大級の1つで、体毛はやわらかで密生しています。オスは淡い赤褐色から濃い赤褐色、メスの背中は青味がかかった灰色をしています。

(撮影：永田健一)

||||| 動物と私 |||||

ピンクのシロチドリ

今年の3月17日、泉南市の男里川河口でピンク色にマーキングされたシロチドリ(オス1羽)を観察しました。このピンクのシロチドリ、両足には青い足環が付けられ、右足にはさらに銀色の足環が付けられていました。胸の黒い帯より下のお腹の部分はきれいなピンク色に染められていて、飛ぶと翼の裏側までピンク色。いっしょにいる他のシロチドリよりずっとかわいく見えました。

10年以上にわたって、大津川や男里川などの南大阪の海岸部を中心にシギやチドリなどの渡り鳥を観察してきた私にとっても、標識鳥の観察は初めてのことでした。この鳥がいつどこでバンディング(鳥類標識調査)されたものなのか、どこから渡って来たのだらうか……。とりあえず、すぐに山階鳥類研究所へ問い合わせしてみました。

数日後、研究所から手紙が届きました。

——前略、シロチドリのマーキング個体観察記録をご連絡いただきありがとうございます。

別紙のとおりこのシロチドリは諫早湾でシギ・チドリ類の移動を調べる為に標識したもので、有

ニホンコウノトリのヒナ誕生

長年の夢であったニホンコウノトリの繁殖が、我国では第3園目として成功しました。ふ化したヒナは3羽で元気に育っています。



納家 仁さん
(財)日本野鳥の会大阪支部)

明海以外からの初めての観察記録です。大変貴重な記録となりました。なお223羽放鳥したうちシロチドリはわずか4羽のみでした。(後略) ——

同封されていた放鳥状況表によると同研究所の尾崎清明さんが放鳥されたもので、放鳥年月日は1992年12月9日、場所は長崎県諫早市小野島町諫早干潟ということが分かりました。

このシロチドリ、さらにもっと北の地方へ旅立ったのでしょうか、翌週にはもう姿を見ることはできませんでした。

さて、今年6月には北海道の釧路で、ラムサール条約締結国会議が開催され、水鳥の生息地であるウェットランド(湿地)の重要性がマスコミ等でも大きく取り上げられました。ウェットランドの中でも特に干潟はシギ・チドリなどの渡り鳥にとってはなくてはならない大切な場所です。しかし我国の干潟の中で、ラムサール条約の登録地として指定されているのは千葉県谷津干潟1ヶ所にすぎません。諫早干潟、和白干潟(福岡県)、藤前干潟(愛知県)など世界的にも貴重な干潟が埋立てにより大きな影響を受けようとしています。シギやチドリなどの渡り鳥は、日本各地の、そして世界各地の干潟や湿地を渡りの中継地として利用しています。

日本最大の諫早干潟から、わずか2haあまりの男里川河口干潟へと渡ってきたピンクのシロチドリは、どんな小さな干潟でも渡り鳥にとってはかけがえのない中継地であることを私たちに伝えているように思われます。

8月、今年もまたシベリアなどの繁殖地で子育てを終えたシギやチドリが日本に渡って来る頃となりました。私もいつも通り、ひとあし早い「秋」を見つけに河口へと向かいます。

(なや ひとし)



お寺の森での環境教育の実践

久山 喜久雄

（フィールド
ソサイエティ代表）

私たちのフィールドは、山紫水明の地と言われる京都にあります。東山、西山、北山と三方を山々に囲まれ、いく筋もの流れが里を潤し、独自の文化が育まれてきました。1000年を越える歴史が刻まれてきたのも、その豊かな水と緑が土台にあったからでしょう。里に近い山々はいつしか里山と呼ばれるようになり、自然の恵みを得る場として生活に密着してきました。一方で人口も急増し、人間たちの活動は燃料源としての森を次々と伐り開くこととなり里山の緑は極端に減少していったのです。その状況は近代まで続いてきました。しかし、本来的に我が国の自然の復元力が旺盛で、禿山に近かった山にも緑は復活し、森の豊かさを取り戻してきました。

そして、生き物たちの命も幾多の危機を乗り越え、今に受け継がれてきました。それを支えたのが、里山の周囲にも保たれてきた健全な環境です。中でも、広大な敷地を持つお寺の存在は大きな意味を持ちました。寺社林は本来的に神聖な場として保護され、様々な樹木も繁り、さらに仏教思想はあらゆる生き物との共生を説いていることから、お寺の森は生き物たちの聖域ともなってきたのです。

とくに、東山の裾野にはお寺が点在し、それらの森は带状に繋がり、森のゾーンを作り出しています。そこは生き物にとって恰好の餌場やねぐらなどを確保することのできる場であり、野鳥や大型の哺乳類にとっては渡りや往来が保証されるなど、種の維持のためにも欠くことのできない場となっているのです。多様な生物が存在してこそ、自然の豊かさを語る事ができるのです。

私が「自然の豊かさ」というものを実感したのは、野鳥を通してのこ



ムササビ

とでした。さらにその事は、ますます奥深い森の観察へと私を誘ってくれました。滑空するムササビに会い、モリアオガエルの卵塊を発見するなど、身近な森は私にとって最高の自然フィールドとなっていたのです。そしてその発見や感激が、お寺の森を環境教育のフィールドにという想いに繋がっていきました。

1985年11月、「法然院森の教室」が始められました。月1回の活動は室内や野外の例会で、様々な自然をテーマに身近な環境から地球規模の環境まで学びの対象にしているというものです。一方的な学習ではなく、参加者それぞれが必要な知識や情報を得られる場という趣旨で、気軽な雰囲気で行われています。参加者の年齢もまちまちですが、若い人も積極的に参加しています。お寺の森は恰好の自然学習の場となると同時に、新たな交流の場ともなっているのです。

活動的な会でありたい。その願いは、森の教室での自然調査の実施という形で実現しました。まずは、ムササビの一斉調査。動物や植物を学んでいる学生スタッフを中心に、数回の調査を実施しました。結果はお寺の境内だけで、十数カ所の巣穴と10匹のムササビの発見でした。巣穴はスギ、シイ、ムクなど数種類の木に確認でき、中には建物の屋根裏に居を構えているのもありました。その調査をきっかけに、学生の自主的な観察が続けられ、ムササビの採餌行動や繁殖行動なども記録され、お寺の森のムササビの生態が徐々に明らかにされてきました。さらに、この調査の副産物として、フクロウ、アオバズクといった夜行性の鳥類やテン、キツネ、イノシシなどの哺乳類の生息も確認することができました。

このようにムササビの調査は森の生態を明らかにしていくスタートラインでもあり、同時に、お寺の森や里山がエンカウンターフィールド（生き物たちとの出会いの場）として大いに期待できる場であることを証明させ、身近な森が環境教



モリアオガエル

育に果たす役割の大きさを認識させてくれました。また、境内では大学生のモリアオガエル研究が3年間続けられ、その結果を森の教室で発表して貰うなど、研究支援と地元への啓蒙が一石二鳥として実現しています。

さらに、私たちの活動を通して学んだものを、より多くの人と分かち合い、地域の良さを知って貰おうと、「フィールドガイド大文字山」(ナカシヤ出版、1990年)を出版しました。大文字山とは法然院の森に続く山ですが、その山やお寺の森の自然を紹介したり、様々なエッセイを通して山への想いを語ってもらうなど豊富な内容になっています。出版した当時、この山域にもゴルフ場の計画があり、身近な自然の保全を呼びかけるためにもこの出版は意味を持つものとなりました。

森の教室の活動で得た知識を子供たちにも伝え、豊富な野外体験を積んでほしいという願いから、1987年に森の子クラブが発足しました。クラブは会員制で、年間10数回の活動ですが、トータルな体験と知識を積み重ねるプログラムを目指しています。とくに、自然と生活を結びつける活動を目指し、自然観察から農業体験までその内容は広いものとなっています。ホームグラウンドは法然院の森や大文字山ですが、客観的に身近な自然を観察できるようにと時にはフィールドを変えての活動も行います。

農業体験やクラフト（木工など）を通して、自然はただ観察するだけのものではなく、自らがそのものに関わり、自然と自分そして生活との繋がりを体験的に知って欲しいと思っています。農業体験は私たちの活動に共鳴してくれた一般市民の方の提供する畑や田で行われますし、クラフトの指導も一般の方の参加によるものです。小さな活動でも社会との接点を持つことで活動の幅を広げ



田植えて農業体験

ることができるのです。

昨年6月の田植えでは、子供たちはその辛さよりも、ぬかるんだ土と戯れ、シマゲンゴロウやミズスマシ、イモリ、カエルなど田や畦の生き物との出会いに我を忘れていました。そして苗を各自持ち帰り、その成育を継続して観察することで、田との繋がりを持ち続けました。稲の花の小さな

開花を見つけた時、子供たちはきっと実りの時を実感したことでしょう。そのことは、秋の稲刈りを迎えるための、ほどよいウォーミングアップになったのです。秋、いよいよ収穫の時です。しかし、大切にしていた稲は無残にイノシシに荒らされていきました。田植えから続けてきた子供たちの期待は残念な結果に終わってしまいました。法然院の森ではイノシシに会ってみたいと思った子供たちでしたが、この田で思ったことは違ったのかもしれませんが、この山の田での僅かな農作業で、自然と共生することの喜びと難しさを感じたことは大きな収穫となりました。

活動で、最初はフィールドにただ浸っている子供たちでしたが、回を重ねるとともにそれぞれの関心事が芽生え、自ら学ぶという姿勢が見えてきました。そして次第に活動の場に自分の位置を発見することができるようになったのです。



けもの道の前で記念撮影

環境教育を実践する場合、発見や驚きに始まる体験学習で心を培い、フィールドを自分の場として認識し、その場に踏ん張れる程の想いが芽生えた時、真の意味で、心に支えられた活動が実現するのです。そのことがあってはじめて、身近な環境を守っていくという姿勢を持つことができるのです。

私たちは身近な場を環境教育のフィールドとして、積極的に開拓し、活用していかなければなりません。そのことが、「地球規模で考え、足下で活動する」ことの第一歩だと思います。幸運にも様々な命を感じられるフィールドが身近に残っていたことによって、私たちも様々な試みを行いましたが、このことは決して例外ではなく、視点を少し変えるだけでユニークな活動を行えるフィールドはどこにでも発見できるのだということをお話しているのです。そして、そんな場がどんどん増え、ひとつの繋がりを持った時、人と自然が共生することが実現していける土台ができるのです。

(ひきやま きくお)

動物園ボランティアの教育活動

動物園でボランティア活動をしていることを話す人と大抵の人に、「動物の世話をしてるの?」とか「掃除してるの?」と聞かれます。そんな時いつも簡単に「入園者に動物の説明をしています。」と答えています。ボランティアという福祉や地域の活動がよく知られていますが、私達の活動は、入園者に対し動物や動物園についての正しい知識を持ってもらうための普及活動になります。しかも「教育活動」に属するようで、果たして、そんな立派なことをしている団体なのだろうか?と会員ながら思ったりします。ボランティア歴数年ではありますが、活動の実態を私なりに紹介させていただきます。

名称は、大阪動物園ボランティアーズ(略称はOZV)、昭和51年にサマースクールの援助のため結成されました。現在、会員数は70名以上で約7割が女性、年齢層も18歳から70歳以上の人まで幅広く参加しています。活動日は毎日曜日と祝日です。中心となる活動はスポットガイドで、午後1時から3時まで動物舎の前で動物の説明をしています。独自で説明に必要なパネルや模型を製作したり、園側から実物の餌や骨格標本などを借りたり、工夫してガイドを実施しています。現在3つの班に分かれて活動しているので、常時3ヶ所のガイドを実施できるようにしています。

代表的なガイドにゾウがありますが、実物の餌や糞を用いて説明をします。一日に食べる量をダンボール箱を用いて説明したり、糞を実際に持ってもらうたりしています。生の糞を直接持つのは抵抗があるので、乾燥させてニス塗った物を使用します。めったに持つことのできない物だけに



ライオンとシマウマのスポットガイド

たいへん興味を示されるし、子供達には特に人気があります。また、ライオン舎前では肉食動物と草食動物の比較ということで、ライオンとシマウマの頭骨を利用して、食性や骨格の違いを説明し

ます。頭骨も実際に触れてもらいます。見たり、触れたりするだけでなく、走鳥類の卵の計測やペリット分析など実験的なことに参加してもらうガイドもあります。ガイドの内容を全部覚えなくても何か一つでも心に残ればいいし、それが動物について少しでも関心を持つきっかけになればいいと思います。

何をしているんだろうという入園者の遠巻き視線を受けながら、呼び込まないと人を集めにくいのは悲しいものがあります。きっと異様な団体に見えるのでしょう。また、子供達が熱心に話を聞いているのに、お母さんが連れ去ってしまって話が途中で終わる場合もあります。私達の活動はなかなか理解されにくいものだと実感しますが、逆に親子で熱心に説明を聞いて、お礼を言われる人もあるので、少しだけでも役に立ったかなと思ったりします。

—— 年間の活動で一番のイベントは、毎年7月下旬に開催されるサマースクールです。今年でもう第19回です。対象は小学校高学年で1組が2日間で開かれます。3つ 鳥の餌の調理実習(1992年サマースクール)の班(①肉食動物と草食動物、②サルと夜行性動物、③鳥類とハ虫類)に分かれて、各班に20名の生徒を引率、指導します。調理実習や清掃実習、触察、実験など動物園でしかできないことを体験してもらいます。体験することによって、動物についての理解を深めてもらうことが目的です。

サマースクール期間中、私達ボランティアは、「日祝に動物のお話をする人」から「夏休みに子供を指導する人」になります。真の教育者ではないけれど、指導者という立場になるわけです。挨拶をさせたり、健康状態に注意したり、お話をきちんと聞かせたりするのも、私達の役目になりますが、興味を持たせたりして動物のことを考える



鳥の餌の調理実習(1992年サマースクール)

きっかけになるような学習方法を考えるのも役目だと思います。「掃除もしたし、動物も触られたし、動物園に来て良かったね!」も十分いいこと



キリンの寝室見学(1992年サマースクール)

ですが、「でもちゃんと目的あるのよ。」みたいなものをボランティア側の意識に持ってほしいと思います。指導するというのは難しいですが、子供達は私達と違った視点で動物達を見ていたり、いろんな反応をしてくれたり発見も多いので、ボランティア自身が貴重な経験をしています。サマースクールは、動物園職員の協力があって実施できる行事なので、「こんなことを体験させたい!」という両者の意見を積極的に取り入れていければと思います。

問題点は、サマースクール終了後の活動に参加する人数が減ることです。サマースクールで力を使い果たすのでしょうか?活動はサマースクールまでと思うのでしょうか?理由はよくわかりませんが、毎年参加人数が減るので何とか改善したいものです。もう一点は、指導者という立場にもかかわらず生徒化してしまうことです。子供達を指導するための事前実習に参加せず、当日参加しても把握できていないため子供と同じように指導しなければなりません。ボランティアやサマースクールに対する意識の問題でしょうか?

サマースクール以外で参加する園の事業に「動物と花のフェスティバル」があります。春と秋に開催され、期間中はステージで動物クイズやゲームを実施しています。バラバラの箱を組み立てて絵を完成させるブロックゲームやパネルをめくって隠されている動物を当てるパネルクイズなど、子供を対象に参加してもらいます。種類は他にもあり、遊びを交えて動物のことを学ぼうというのが目的です。ゲームやクイズの後、簡単に動物の説明を必ずしますが、何となく楽しんで終わりみたいな感じがなくありませんが……。

以前、投餌防止をテーマとした劇を実施しました。内容的には、お菓子などを与えないよう訴えたもので悪くないと思うのですが、私達は劇団に所属しているわけではありませんので、演技力も当然ありません。劇をするのは画期的な案なのでもっと計画的に練習をしたり監督を決めれば、良くなると思います。でも私達って劇には向いていないと痛感してしまいました。

ステージでの一番人気は、天王寺博覧会の時の

マスコット、テンバク君のぬいぐるみです。今ではボランティアのマスコットとして、ステージにいつも登場してもらいます。中に入る人は暑くて



ステージで大活躍のテンバク君

たいへんですが、人を集めるには欠かせない存在です。マナーを訴えることも大切ですが、楽しんで参加する場も必要ではないでしょうか。

主な活動を紹介してきましたが、他の団体と比べて社会に貢献しているという感じが無いのは、動物園が「教育の場」として社会的な役割があるという認識があまりないせいでしょうか?だから積極的に参加するボランティアが少ないのでしょうか?ボランティアは決して特別なことではないけれど、義務感や責任感に全く無縁の活動ではありません。参加の強制はできないけれど、個々の会員の自主的な参加によって活動が成り立っているという意識と、私達の動物園での役割は、入園者に動物や動物園を正しく理解してもらうために活動しているという目的意識を常に持って活動してほしいものです。また、動物園側との協力でいろんな活動ができることも忘れてほしくない点です。

入園者向けの活動以外にボランティア向けに勉強会、野鳥観察会、ムササビ観察会などを実施しています。観察会は毎年実施していて、いい経験になるのですが、それ以上の展開にならないのが残念です。普段の活動にいかせるような参加をしてほしいと思います。

今後はスポットガイドはもちろん実施しますが、その延長にあるツアーガイドの実施や、ガイドに結びつくような研究、調査なども実施できればいいと思います。動物についての知識を増やすだけでなく、入園者との対応の仕方や子供の指導方法など必要とされる点も多いので、心して活動していきたいと思っています。もしかしたら他の団体よりお気楽なボランティアかもしませんが、自覚と責任をもって活動したいと思っています。ボランティアの意味や役割を考えて活動できる意識面での向上を目指しています。お仕事の邪魔にならないように活動しますので、今後ともご協力をよろしくお願いします。

(大阪動物園ボランティアーズ)
運営委員長 山本貴洋子



堂々1位はゾウさん。身体に似合わない小さな目で子供達を見続けています。



人気投票時には、まだ入園していませんでしたが、レッサーパンダ舎はいつかたくさんの人です。ココも同じく投票は入園していませんでしたが、どちらも今、人気投票をすればベスト10入り確実の人気者です。



鳥類で唯一のベスト10入り。しかも3位のペンギン君。愛敬のある仕草は、みんなの心を和ませます。



第5位のトラは、某球団のファンが多い大阪だけに、おっちゃん達にも人気があります。近くで見ると、やはり大迫力です。

グرافZOO

あなたの好きな動物は？

今月は人気投票（1986年）の結果を参考に人気動物にスポットを当ててみました。

ひいき動物は人によって違いますが、可愛さ余って餌をあげたり、動物たちを傷つけるようなことはやめましょう。

（撮影：前田 茂）



首の長〜いキリンは、第2位でした。高い所から見る世界はどんな風景でしょう。



にゃんこではありません。4位にランキングのライオンです。現在当園には、タテガミのない子供のオスしかいませんが、そのうち百獣の王らしくなると思われます。



6位のおさるさんたち。赤ちゃんもたくさん誕生し、微笑ましい光景を見ることが出来ます。

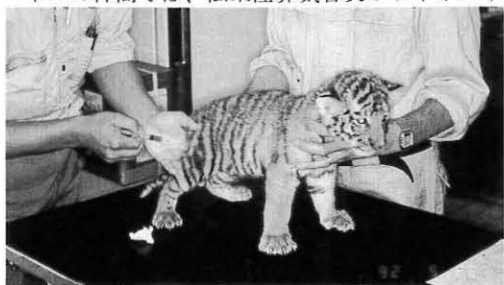
動物たちを伝染病から守るために

§ ワクチン接種(予防注射)

皆さんも日本脳炎などの怖い伝染病を予防するためにいろいろなワクチンの接種を受けてきたことと思います。動物園でも動物たちが伝染病にかからないように、ワクチンの接種を行っています。

イヌを飼われたかたなら知っておられるとは思いますが、ジステンパーはウイルスによって起こるとも恐い病気です。この病気にかかるとかなりの割合で死んでしまいます。主な症状は肺炎ですが、ほかに脳炎も起こす場合もありますので、こうなると治療の方法はありません。過去に動物園でも、オオカミでジステンパーが発生し、治療の甲斐もなく死亡したことがありました。現在では、予防のためにワクチンを接種していますので、発生はみられなくなりました。

ネコの仲間では、伝染性鼻気管炎がライオンや



アムールトラの子供へのワクチン接種

クロヒョウで発生し、死亡したことがありました。これにかかると元気・食欲がなくなり、鼻汁がみられます。ライオンでは、なぜか上まぶたが垂れ下がるといふ症状もみられ、ひどいものでは肺炎を起す場合もあります。昭和55年当時、ライオンは10頭飼育していましたが、うち6頭が発症し、治療にもかかわらず、4頭が死亡しました。クロヒョウは、昭和57年当時、1つがいでしたが、つぎつぎと伝染性鼻気管炎にかかり、残念ながら治療の効果もほとんど無く2頭とも死亡してしまいました。まもなくこの伝染病にきくワクチンが入手可能になり、動物園でも使いはじめたところ、その後の発生はなくなりました。このときはネコ科の動物にとってはまるで救世主でも現れた感を使うことができます。

キジの仲間でも、恐ろしい伝染病があります。それはニューカッスル病や伝染性気管支炎、鶏痘などで、このような伝染病にならないように、ワクチンの接種はかかすことができません。私が、動物園で働きだしてまもないころ、シチメンチョウに鶏痘が発生しました。その頃キジの仲間ではシチメンチョウだけが、ダチョウなどがある走鳥舎で離し飼いにされていました。都合によりこのシチメンチョウたちのワクチン接種は先送りになっていました。それが大きな仇となりました。当然、ワクチン接種がなされているキジ舎の鳥たちには何の異常もありませんでした。しかし、シチメンチョウは大変なことになりました。通常、鳥の痘病というものは、皮膚にできもののような病変ができるだけですが、この時は口の中

獣医室から

60

から食道、さらには胃の中にまで、ひどい病変ができてしまいました。残念ながら全力をあげた治療も効をなさず、6羽いたシチメンチョウのうち4羽が亡くなりました。

このようなことからワクチン接種というものは動物園でも欠かせないものと言えますが、しかし、副作用なく全く安全かというわけではなく、副作用の心配があります。かつてのワクチン接種で副作用が疑われる出来事が一度ありました。伝染性鼻気管炎用の混合ワクチンを応用しはじめた頃、トラ5頭にも接種しました。ところが接種後10日ほどたって、姉妹の2頭が次々と、まるで脳卒中にでもかかったように四肢に麻痺をきたし立ちあがることができなくなりました。点滴等の治療により、1頭は完全に回復したものの、残りの1頭は右の前足に障害が残る結果となってしまいました。ワクチンの接種が原因であるとは断定できませんでしたが、状況からみてワクチンの副作用であったと思われます。

§ 検疫

動物園では新しく入園した動物たちは、必ず一定期間の検疫をおこないます。栄養状態の確認、体表にダニやノミ等が寄生していないか、糞便の寄生虫卵検査や細菌検査等をし、悪い病気にかかっていないか見るのです。また結核を未然に防ぐ



ブタオザルへのツベルクリン接種

ためにツベルクリン検査や胸部のX線検査も実施しています。ツベルクリン検査は、人では腕に皮内注射して行うわけですが、動物では種類によっては接種する場所が違います。たとえば、サルでは腕に毛があるため、上まぶたに注射します。「災害は忘れた頃にやってくる」という諺がありますが、伝染病も同じこと。「転ばぬ先の杖」をいつも念頭に、防疫に努め、動物たちが恐い伝染病にならないように努めたいと思います。

(飼育課：森本 委利)

6/1. 「ヒツジの毛刈り」を実施しました。梅雨時期のヒツジの健康保持と夏を涼しく過ごせるようにと毎年6月の初めに実施しているものです。

6/2. マナヅルが1個目を産卵しました。

6/4. マナヅルが2個目を産卵しました。ニホンジカのメスが1頭生まれました。

6/5. コンゴウインコが産卵しました。

6/6. 昨年10月にふ化したオオサマペンギンのヒナが初めてプールで泳ぎました。

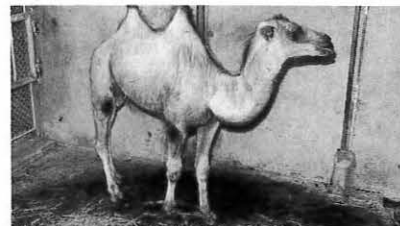
6/8. ニホンジカのメスが1頭生まれました。

6月11日 ニホンコウノトリが3羽孵化しているのを確認しました。5月7、8、10日にわたり3個を産卵し、以後オス、メス交代で抱卵していました。今回ふ化に成功したつがいは、オスが友好都市の上海動物園から昭和62年の動物交換で来園したもので、メスは多摩動物公園から平成3年より繁殖を目的としてお借りしているものです。これまでニホンコウノトリのふ化に成功したのは、国内でニホンコウノトリを飼育する9施設のうち2園のみで、当園が3園目になります。

6月17日 ホンドギツネのオス1頭とキタヤマドリのメス1羽を、秋田市大森山動物園のご厚意によりいただきました。ともに近日中につがい形成をはかる予定です。6/20. 第97回動物のお話とスライドの会で「はてな大集合?」と題し、楽しい動物クイズを行いました。6/21. ブラックバットのオスが1頭生まれました。6月23日 フタコブラクダのオス1頭を、広島市安佐動物公園のご厚意によりお借りし



ホンドギツネのオス1頭とキタヤマドリのメス1羽



今月もおもしろ情報満載

ZOO DIARY



ました。フタコブラクダは、メス2頭のみを飼育していたことからオスを探していました。また、同時にテン2頭も寄贈していただきました。テンは夜行性動物舎に展示する予定です。

6月24日 キタキツネのメス1頭が来園しました。5年前にメスが死んでからオス1頭となり、メスを探していましたが、今回



旭川市の旭山動物園のご厚意でいただけることになりました。これまで飼育していたオスも同園から寄贈していただいたものですので、同郷のつがいができることとなります。

6/27. キョンのメスが1頭生まれました。6/28. 今年生まれのシュバシコウのヒナが巣立ちする前に、それぞれ識別できるように足環をつけました。

6月29日 (社)大阪市天王寺動物園協会(会長西尾照子)の平成5年度通常総会が園内



のレクチャールームで開催され、各議案について原案どおり満場一致で承認されました。なお、役員の一部改選については、玉井大阪市建設局長が本年4月定年退職されましたので後任の佐々木建設局長が理事に、また森永製菓(株)の江畑支店長、雪印乳業(株)の佐藤支店長、(株)大信アイスの佐野社長が理事に承認されました。

☆テレホンサービス：771-9999
☆お知らせ：●動物園のおじさんの話「ゾウのふれ愛ガイド」
日時：8月15日(日)午後1時～1時45分
場所：ゾウ舎

愛ある暮らし、応援します。

Kintetsu

近鉄百貨店

DEAR LIFE BOOKS



生態・飼育・図鑑が一つの本の 中にギッシリ

中川道朗・岩合徳光／監修
B5変型判・オールカラー
定価600円

動物園で暮らす様々な生き物達、
自然の中ではどんな暮らしをして
いるのか？ 動物園での世話
の仕方は？ 仲間はず？ など、
写真と精密イラストをまじえ紹
介します。

くらしといかたシリーズ<既刊本>
B5変型判・オールカラー・各定価580円

むしくらしと いかた

野山でみかける身近な昆虫たち
250種を紹介。

ちいさいきもの くらしと いかた

昆虫以外の小さな生き物を320
種紹介。

お求めは、お近くの書店で。 ひかりのくに株式会社 本社/〒543 大阪市天王寺区上本町3-2 ☎06-768-1151代表

オートフォーカスカメラに



フジカラー SUPER HG 400

ピントが合いやすいフィルムです

カメラの大林

桜橋本店 ☎341-8091
阪急三番街店 ☎372-5031
OHVAC店
(ギャレ大阪) ☎346-7606

動物の生態を描く唯一の文学雑誌

動物文学

昭和九年平岩米吉によって創刊

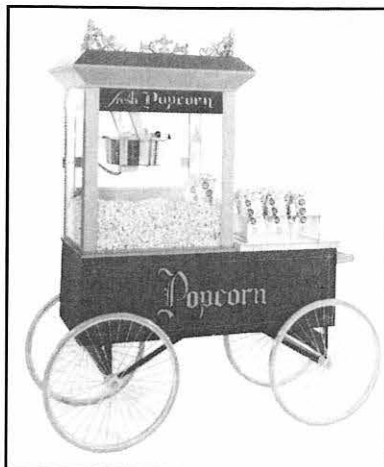
本誌は生態研究を基礎として動物文献を収集整理する
とともに、シートン、ザルテン、バイコフ等の諸作家
を紹介した本邦動物文学の母胎です。

<研究・考証・記録・随筆・翻訳等を掲載>
会費/年1,500円(切手72円・呈既刊号目次)

動物文学会

〒152 東京都目黒区自由が丘3-12-2 電話03(3717)1659・振替・東京5-9800

マスタのポップコーン



<営業品目> 製造機械・保温機 他
生コーン・袋詰ポップコーン・原材料一式

(株)増田食品 〒561 大阪府豊中市穂積1-10-30
TEL (06) 865-0165

新作
貸出用ビデオ「楽しい天王寺動物園」
19分(10本常備)

- 対象/保育園・幼稚園・小学校の先生
- 貸出期間/10日間
- 貸出料/無料(但し郵送料480円は必要)
- 申込先/当協会まで手紙かハガキでお申込下さい。

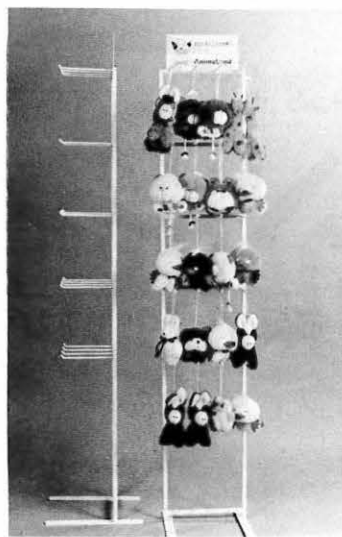
コアラテレホンカード(限定販売)
好評発売中 ¥800(50度用)

天王寺動物園の本 入園の記念・手引に……



オールカラー
500円 園内売店にあります。

大阪市天王寺動物園協会 〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74 ☎(06)771-0201

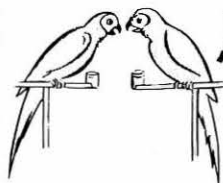


動物ぬいぐるみは 子供のゆかいなお友達

各種ぬいぐるみ企画・製造・卸

有限会社 **アニメランド**

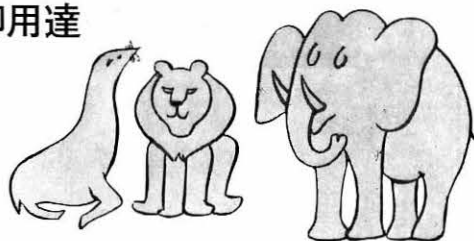
〒547 大阪市平野区西脇4丁目5番22号
TEL: (06) 704-8580
FAX: (06) 704-8565



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達

- ・医学実験用動物
- ・宣伝用、テレビ用、貸動物
- ・原色世界雑類図鑑(34種1枚もの)要郵便券250円

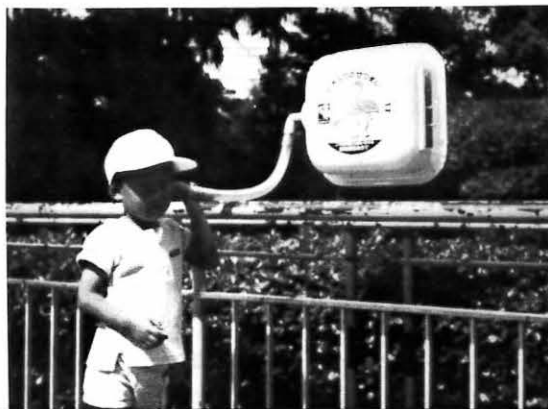


有限会社 **吉川商会**

本社 神戸市中央区中山手通3丁目11番4号
飼育場 兵庫県小野市来住町1513番地

電話(078)221-8195(代)

たのしい動物のお話は、 ガイドマシン(動物説明機)で、どうぞ!!



園内、主要動物舎
30数ヵ所にあります

関西特機株式会社
電話 06-762-2333
1回 20円

動物園内での お食事、 ご休憩は

動物園内.....

中央売店

TEL 06-771-0973

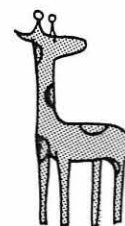


お食事・飲み物・おみやげ

動物園内
南園売店 TEL 06-771-7110



園内での写真は... 動物園協会指定写真部へご用命下さい!!



◎随時係員が待機して
おりますのでご説明
に伺いました際は、
よろしくお願ひ致し
ます。

カラー写真 キャビネ1枚 500円

撮影無料にてキャビネ1枚をサービスさせて戴きます。
撮影予約も受付しておりますのでご連絡下さい。

国際航空写真株式会社
TEL 06-856-7444



Our Yogurt has fruity
and rich texture!!

“生イキヨーグル”と
覚えてね。



「ほりたてミルクのおいしさが、生きている。」

雪印
オガール

希望小売価格 130g/各120円 250g/各220円(税別)



HIJIRI-KOJIMA

一日
愉快地
たのしめる!!



◎園内3ヶ所(南園高架下・北園中央デッキ北側・北園高架下)に各種のりもの、があります。

久竹娛樂株式会社
TEL(06)541-3938(代)

なきごえ

1993年8月10日発行(毎月10日発行)第29巻 第8号(通巻336号)

編集/大阪市天王寺動植物園事務所

発行人/大阪市天王寺動物園協会 土井良彦

印刷所/株式会社 松村善進堂 定価150円(送料共) 1年継続(12部) 1,650円(送料共)

〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74

電話 大阪 (06) 771-0201

振替口座 大阪 3-3 7823

編集委員

(中山良三郎/岩倉善樹/中尾啓一/樽本 勲/中川哲男/吉本昌俊/山根和弘/谷森 進/宮下 実/長瀬健二郎/榊原安昭)
(森本委利/竹田正人/永田健一/前田 茂/大野尊信/野口秀高/早川 篤/堀内智生/大川光雄/土谷正道/山元貞幸)